

「貴司山治」はなぜ「きし・やまじ」か

伊藤 純

疎開列車の記憶

昭和二十年五月、夜の東京駅は米軍の絨毯爆撃じゅうたんぱくによって焼き尽くされつつあるこの街から逃れ出る疎開民でこった返していた。数少ない関西行きくわんせいの夜行列車が出るプラットホームは灯火管制で薄暗く、列車を待つ人々で黒々と埋まっている。人々は乗車口毎の行列となって辛抱強く待っていた。

その頃の生活には「行列」が必須だった。わずかな野菜を買うためにも、米の配給を受けるためにも、何で作られたのか分からぬ小さな菓子の一片にありつくためにも、行列が必須だった。何はともあれ行列することが重要な生活手段であり、人々はそれに馴れていた。

列車が入ると、行列がそれぞれの乗車口のりかどごとにもぞもぞと動き始めた。父と中学一年生の私と、赤子を負ぶった母との私たち四人家族もその行列の中頃にいた。ずっと遠い行列の先頭の昇降口では、いくらか押し合いながらも人々が暗い客車の中に流れ込んでいた。

父は、四人の先頭になって、列の前の男の背にぴったりとくっつき、早く進めといわんばかりにその背を押していた。前の男が、苛立たしそうに振り向いた。皆焦っている。気の小さい私は、父を取りなすような気持ちで、その腕を引き戻しながら

「座れないかも知れないね。」

と伸び上がって列の先頭の方を見ていった。

その時だった。突然父は列を離れて昇降口に駆け寄った。そして辛くも行列を維持しながら列車に乗り込んでいた人々の列の横合いに突進したのだ。たちまちもみ合いが起こった。数人の男が割り込んできた父を押し返し、何か低く怒鳴りながら突き飛ばした。それでも父は狂ったようにしばらくもみ合っていたが割り込むことは出来なかった。

人で一杯の薄暗いプラットホームは、押し殺したように静かで無関心だった。人々は数少ない列車にかじりついてでも乗らなければならないのだ。かたわらの争いにかまけていないとまはない。

席も通路も一杯になって、列車は走り出した。車内は非常灯だけで薄暗く、それだけでは足りず、艦砲射撃を受けるかもしれないというので海側の窓は錠戸が下ろされていた。

翌日の午後、列車は古びた京都駅に着き、私たち四人は満員列車から解放された。街の焼けるにおいも喧嘩もない京都は、耳鳴りがするように静かだった。

ただ、ホームをいざっていた一人の乞食が、地面に落ちていた小さなゴミを拾って何のためらいもなく口に入れるのを見た。ここで私たちは山陰線に乗り換え、疎開の目的地である

丹波山中へと向かった。……地面のゴミを何のためらいもなく拾って食べた乞食の虚ろな目が、戦時京都との出会いだった。

それにしても、あの、行列の側面に突進した父を見たとき、中学生の私は驚くというよりも「またやってる」と、ほとんど苦笑した。母親もあまりそういう父には同情的ではないようで「いやあねー」というだけで、止めにいたり引き戻しにいたりする様子はなかった。要するに父は、関西弁でいう「イラチ」だった。だから、不安な状態でじっと列車の乗車順を待っていらなかったのだろう。今でいえば「順番を待つこと」に関するパニック症候群である。

そこで想起されるのは、貴司山治というペンネームについての伝説である。

私もどこかで聞いた記憶があるのだが、貴司が宴席などの座興として自分のペンネームの由来について語った

「自分は汽車をプラットホームで待っているあの不安定な時間がとても嫌いなので、一番嫌いなものを名前にすれば飽きがこないだろうと思って「汽車待つ時間」「汽車まつ時」「きし・やまじ」「貴司山治」とした」

という駄洒落めいた話である。本当のことだろうか？

私はこれはやはり宴席向けの駄洒落を出ないものだろうと思っている。私はこの“伝説”に関わらず、ずっと以前から貴司山治というペンネームの姓の部分「貴司」は、貴司の最初の妻「恵津」の元姓「奇二」に由来する、と内々思っていた。

阪神間モダニズムと大阪割烹学校

貴司は、大正九年に懸賞小説募集に応募した「紫の袍」が選外佳作になったのをツテに、その募集主の大阪時事新報社に押しかけて文化部記者に採用された。それからまる四年の大阪の記者生活で、天王寺動物園の園長だとか松竹新喜劇の源流ともいうべき喜劇俳優曾我廼家五郎、あるいは共産党系労働組合・評議会の委員長野田律太など多彩な人々と繋がりが出来た。だがそれ以上に特筆すべきは、有名人ではないが貴司が深く関わることとなった幾人かの人々である。

〔大阪割烹学校と的場多三郎〕

その一は、「大阪割烹学校」という料理学校のオーナー兼校長の的場多三郎である。大阪割烹学校は明治四十年頃創立され、貴司が入りするようになった大正十一年には既に二十年近い歴史を持つ大阪でも有数の料理学校となっていた。おそらく貴司は当初は文化部記者の取材先として訪れたのだろうと思う。

この学校の特徴は、プロの料理人を養成するのではな



写真1・大阪割烹学校校長 的場多三郎氏(中央)
前列は割烹学校の生徒たち

く、あくまで若い女性たちの教養として料理やマナーを教える、いわゆる「花嫁学校」であった。フランス料理なども教え、さらにその機関誌『大阪割烹学校雑誌』をみると、カロリーの計算法とか栄養学的な解説、最先端の文化教養・時事解説など、まさに大正の教養主義ともいふべき雰囲気満ちあふれている。例えば月刊化第一号・大正十二年四月号の巻頭論文には「新しい常識として婦人の為に相対性理論を説く」とか「仏教における女性観の変遷」「我国婦人の政治的生活の将来に就いて」とか、これが料理学校の機関誌かというような表題が目白押しである。

要するに料理という文化を媒体としながら、若い女性たちを幅広い教養を持ったインテリゲンチヤに育てようというのが的場という人の教育理念だったと考えられる。その風貌もユダヤ髭を蓄え、山高帽に三つ揃というバタ臭い格好である。雑誌も大正十三年からは「婦人之世紀」という、より教養誌的な題号に変わっている。

そういう姿勢が時代に合致したのが、大阪割烹学校は三百人以上の生徒を擁するまでになった。その生徒たるや、某実業家の令嬢、某資産家の若夫人、郊外大地主の令嬢などに始まり、中流サラリーマンの娘たちなど、いわば阪神間のハイソの若い女たちが網羅されている。

そして、広く考えると、このような教養主義の花嫁学校にハイソの子女が集まるといふ現象こそ、大正中期から昭和初期にかけての、辛くて暗い「明治」を通り抜けた日本が初めて経験する近代化の夢、大正ロマンの開花を物語る。ことにこの大正ロマンは、小林一三の阪急電車、阪急デパート、阪神間の高・中級住宅地の開発などに象徴されるように、この時期、東京より阪神間に顕著だったと考えられる。

他方、徳島の鳴門は、その京阪神へは一晚の船旅を要する僻遠の地だった。そんな片田舎から非常な決心で飛びだしてきた一青年にとって、阪神間モダンリズムの大都市、なかならずハイソの娘たちが集う料理学校はめくるめくものであっただろう。

貴司は記者に採用されて二年半後（大正十二年初め）には、割烹学校の機関誌『大阪割烹学校雑誌』月刊化の仕事を引き受けるにいたる。

それも誠に乱暴な話だが、ともかくにも百五十頁のA5版総合誌である。その編集発行を貴司と的場校長という編集出版の素人二人でやろうというのである。実際この時点で貴司自身が「これだけの雑誌を月刊するためには普通なら最低五〜六人のスタッフがいるけれど……」という意味のことを書き記している。無理は分かっていたようである。その結果予想通り二人はほとんど事務所に泊まり込み徹夜徹夜の連続で辛くも創刊にこぎ着け、その後もほぼ月刊が維持されている。

この時期の貴司の年譜では表向き大阪時事新報記者となっているが、このように割烹学校入り浸りの状況で、給料を貰っている時事新報社にはいつ出社していたのか、その仕事はいつやっていたのか分からないくらいである。

そこまで入れ込んだ割烹学校の生活で、貴司は後の妻「奇二系つ子」（戸籍名は恵津）と巡り会うことになる。

〔浪速の粹人・江原鈞との出会い〕

割烹学校と並んで貴司にとっても一つ重要な出会いがあった。それは、割烹学校の講師として出入りしていた江原鈞（江原金兵衛）という人物と知り合ったことである。

江原氏は貴司の十歳年長。船場に豪邸を構える醤油醸造家の御曹司である。グルメ、カメラ、社交ダンスの超趣味人で、カメラに至っては精密な小型カメラを自ら設計し手



写真2・昭和初期の江原鈞氏

作りしてしまうというオタクぶりであった。そして、後に貴司の妻となる奇二ゑつ子の姉初子の夫でもあった。さらに後のことではあるが、昭和十年代には神戸の高台に瀟洒な洋館を建てて移り住んだ。窓からは神戸の港が一望に見渡せ、夜には汽船の汽笛がこだまし、部屋には常に高級なパイプタバコの香りが漂っていた。（戦災によってこれらは総て灰燼に帰した）貴司はこの江原氏からグルメとカメラの手ほどきを受けたのである。但しプロの域に達していたという江原氏の社交ダンスだけは全く受け付けなかったようである。

江原氏の粹人ぶり、オタクぶりは確かに浪速の金持ちの粹な趣味の世界に通じるものがある。ただ、決して織田作之助が描いたような、古いタイプの浪速気質ではなかったことに、やはり、大正という時代の息吹を見ることが出来る。グルメ、カメラ、ダンスなどはいずれもモダンな、新しいタイプの浪速気質といえる。

田舎から出てきて間もない時期に、このように、的場多三郎、江原鈞などとの出会いによって阪神間モダニズム、大正ロマンの生活意識そのものに接したことは、その後、プロレタリア文学、リゴリスティックなリアリズム文学に納まりきれない貴司の小説や生活意識の幅の広さと乱れとに影を落としていると思わずにはいられない。

「奇二家」の美人三姉妹

奇二家は、大阪府茨木市の大地主であった。近くの高槻市には国指定の、藤原鎌足の墳墓と推定されている安威山古墳があるが、奇二家はこの鎌足に付き従ってこの地に入植した属臣とも伝えられる。その巨大な茅葺きの豪邸は、今も茅葺きを維持して現存し、奇二ゑつ子の次世代、次々世代の方々が住んでおられる。十年前に大変な費用を費やして萱を葺き替えたということ、江戸時代の外観をとどめ、枯山水の庭も現存する。



写真3/4・奇二家建物(上)と枯山水の庭(下)
(非公開)2007/12伊藤純撮

この奇二家には大正十年代、三人の美しい姉妹がいた。初子、ゑつ子、善子の三姉妹である。あえて“美しい”といったのは、この三姉妹の長女初子の夫が、前に述べた江原鈞氏で

あり、そのプロ級の腕前で多くの写真を残していてその姿がよく分かるからである。

この中で、初子とゑつ子が大阪割烹学校の卒業生だった。中でもゑつ子は文章が上手いということが知られていて『割烹学校雑誌（婦人之世紀）』に、ことに月刊化の初期にはほとんど毎号短文を寄稿している。そして、その当時雑誌の編集に当たっていたのが貴司であり、再三寄稿の依頼や入稿の催促をし、そのナイーブな文章に大変惹かれていた。



写真5・奇二家の三姉妹、左から恵津、善子、初子

大正十三年一月号の編集後記（談話室という記事）に

「奇二ゑつ子さんは、本誌が発見した唯一の練達なる文章家で、ご本人はまだやつと二十、大阪府三島高女の出身　どこでどう啓発されたのか夏目漱石を女で行ったやうな立派な散文を書かれます。……ふだんは唯もう滅多に口もきかないはにかみやのお嬢さんで此方からものをいふのも気の毒な位ですからいつもお手紙で原稿書きを強要して次ぎ次ぎにあの珍しいエッセイを巻頭に載せてみますが、その簡勁と、素樸にして詩味ある主観と、暢達と、一般の若い婦人中にはなかなか得易くない才能であります（め）」

*「め」は貴司の編集部でのあだ名「めがねさん」の略

と激賞している。

しかし、明らかにお互いに相手を意識し始めるのはもう少し後、大正十四年六月二三日の三重県津の阿漕の浦への潮干狩り旅行あたりからのようだ。

奇二ゑつ子もその八月号の婦人の世紀に「私も阿漕に行きました」という意味ありげな題名の短文を寄せ、言質をとられることのないような極めて慎重な言い回しで貴司のことに言及している。そしてその後一、二か月の内に事態は驚くべき展開を見せる。

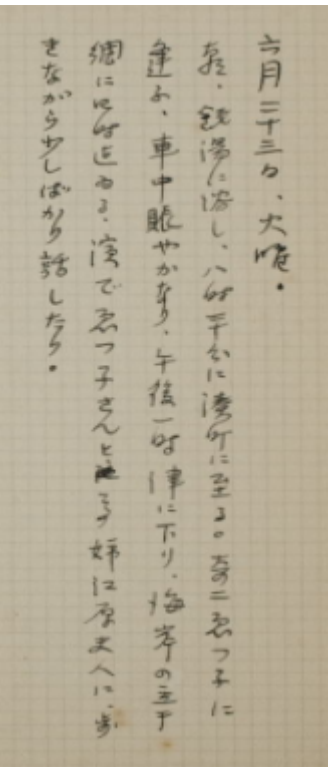


写真6・阿漕の浦での奇二恵津との出会いを記した大正十四年の貴司山治日記

阿漕の潮干狩りから一ヶ月あまり後の八月、突然貴司は、内気ではにかみやのはずの奇二ゑつ子から、唐突な手紙を受け取るのである。この手紙自体は発見されていないので「私の文学史」*に貴司が書いていることから要約するしかないが、その内容は「気の

*「私の文学史」・「貴司山治インターネット資料館」

表向きは雑誌の編集者と寄稿家という関係以上のものではない筈だから、突然それを飛び越えたプライベートな相談の手紙は唐突というほかない。しかも、怜悯なゑつ子の文章は、たとえどちらに転んでも傷つくことがないような遠回しな暗喩的なものだったようだ。しかし貴司も、機関誌の編集を引き受けて以来の彼女の文章の才、一応ビジネスベースといいながら、「愛すべき詩人」（貴司の日記の中のゑつ子についての一言）としてその才に惹かれて取り交わしてきた手紙、その果ての阿漕の浦での無言の交情、などから、正確にその手紙を求愛の一書と認識した。

その後の展開は早く、半年後の大正十五年四月に結婚し、翌五月には駆け落ちに近い形で東京へ移住し職業作家生活に入ってしまった。

ペンネーム「貴司山治・きしやまじ」の登場

以上のような奇二ゑつ子との関わりの中で貴司山治という名前がどのように登場してくるのを見てみよう。

貴司山治というペンネームが最初にはつきりと使われたのは、一般には時事新報（東京）が募集した新聞小説に応募した「新恋愛行」（応募時は「故郷」という題）で、大正十三年の年末に書き上げて投稿している。本名を使わなかった理由としては、大阪時事新報の社員が同系列の東京時事新報の懸賞募集に応募するのは差し障りがありそうだという配慮からだったようだ。

しかし、実はこれ以前にもこのペンネームは使われていた。

大正十三年五月号の『婦人の世紀』に貴司山治名で「我が国の婦人は何を争うべきか」という硬派な論文が掲載されている。この号にはこれ以外にも伊藤好、めがねさん、一記者、さらには“北小路龍子”といういかかわしげな名前でも貴司の文章がのっていて（後述）、併せて七つにもなる。貴司が編集者兼ライターとして書きまくったのだらうけれど、多分同じ人ばかりが書いているという印象を避けるためにペンネームを使い分けたと考えられる。

ところがさらに精査すると、やや推理を要する事態が見出される。

大正十二年十二月号の巻末欄に投稿人選作の発表がなされており、その中のF賞として兵庫県三原郡洲本市の「貴志山治」という人の「先生」という作品が挙げられているのである。そしてこれら入賞作品はいずれ本誌に発表すると書いてある。

ところが、他の人のものは後に掲載されたものもあるが貴志山治作「先生」は行方不明である。そして翌大正十三年一月号では奇怪な事態が起こる。この号に北小路龍子名で「先生の思ひ出」という小説が載るのである。さらにこの見るからにいかわしい作者名の作品について、次の二月号の編集後記で読者の質問に答える形で

「先生の思ひ出」は別段小説ではありません。まあ少女小説とでもいふやうなものでせう。作者の名前はあれは匿名です（め）」

と(め)氏が述べているのである。いうまでもなく(め)は(めがねさん)すなわち貴司のことである。この言い回しからいって、「先生の思ひ出」は貴司の作品でありペンネームは自分だ、といっているようなものである。

さらにこれには後日談がある。

四年後、昭和三年八月号の雑誌「富士」に「純情物語・生ける屍」という貴司の娯楽的小説が掲載されている。この小説の発想や展開が「婦人の世紀」に載った北小路龍子の「先生の思ひ出」に酷似しているのである。編集後記の文言なども含めて考えると、「先生の思ひ出」は貴司が書いたもので、後年貴司はそれを底本として「富士」という商業雑誌向けの小説に書き改めたということはほぼ間違いないだろう。ただ、そのもう一段階前の「先生」が何だったのかは今となっては分からない。

想像されることは、あまり集まりがよくない読者投稿を賑わすために編集者兼ライターである貴司自身が「サクラ投稿」したのではないが、従って「先生」と「先生の思ひ出」は同一作品ではないかという推測である。その時サクラ投稿用のペンネームを、その頃激賞し大いに惹かれていた茨木在住の「愛すべき詩人」奇二丞つ子の苗字をちょっともじってつけたのではないか、ということである。そしてそれが「きしやまじ」というペンネームの初出ということになる。

鳴門高島にあった「やまじ」

では「山治」という名前の方はどこからきたのだろう。

「山治」をヤマジと読ませるのは無理な“湯桶読み”^{ゆづつみ}である。普通に読めば「サンジ」であろう。志賀直哉も取材に訪れた貴司の名刺を見て「何だ、野狐三次みたいな名前だ」といったというが(貴司の直話)やはりサンジと読むのが自然だろう。それをあえて「ヤマジ」と読ませるのは何か理由がなければならぬ。

昨年(2007年)年初の文学書道館での貴司山治展に続いて、十月から十一月にかけて鳴門市立図書館で貴司山治のミニ展示が行われた。その準備や講演会などで何度か鳴門市を訪れているうちに、鳴門市高島に「山路」という地名があることに気付いた。

さらに、貴司の昭和十三年の手記の中に、幼少期の記憶に強く焼き付けられた、この「山路」にまつわる鮮烈なエピソードが記されてあるのを発見した。

要約すれば

「尋常小学校の五年か六年の頃、慕っていた岩野先生(男性)が数日風邪で休んだ。それで、“山路”集落にある先生の下宿に何人かの同級生と見舞いにいった。夏の、斜めの日があかあかと照りつける夕方だった。先生は大変喜んでくれたのだが、独



写真7・鳴門市高島の“山路”(国土地理院1/25000地形図「撫養南東」より)

身で下宿しているとはかり思っていたその下宿に、非常に美しい女性がいて、初めて先生は結婚していることを知った。

ところが何故か、その美しい女性が貴司を「ヨシイチさん」と呼んで非常に親しげにいろいろ聞くのである。(貴司の名は好市こういちだが親しい人は“好ちゃん”とか“好市さん”と呼んだ)その女性に記憶がない貴司は不思議というより何か普通でないものを感じたのである。

そこで、帰宅して母親にそのことをいって、母親はあきれ顔で

「お前、早やもつ忘れてしもたんか。あれだけ可愛がってもろたのに。」

という。聞くとあの美しい女人はすぐ隣の満祐まんゆさんの娘で、五歳六歳の頃毎日のように遊びに行つて絵を描いて貰つたり折り紙を折つて貰つたりしていたではないか、というのだ。

そう聞いて、貴司は自分におののいた。ほんの五、六年前のことなのに思い出せないのだ。聞けば、隣にいた満祐さんは母親が早くなり父一人娘一人という暮らしだった。満祐さんは放蕩ものであまり家に帰らず、美しい娘が一人で暮らしていた。その頃貴司はその娘に可愛がって貰つたことになる。やがて娘は岩野先生に縁づいて、隣の家は空き家になった……。

「でもな」

母親がいう。

「あまり訪ねていってはいけんよ。あのサマは胸を患うところけん。」

そして二、三年後に、あのサマ……あの美しい女人はやはり亡くなった。山路の丘の麓の岩野先生の家に見舞いに行ったときの、親しげに語りかけてくれた美しい女人と、岡に映えたあかあかとした夏の夕日の記憶だけが長く心に残った。」

このような手記をみると、やはり、生まれ里の「山路」という固有名詞は貴司の心底に深く焼き付けられていたと考えないわけにはいかない。

確たる証拠を、といわれれば挙げることは出来ないけれど、数年後には結婚するにいたる「愛すべき詩人」系つ子の元姓「奇二」と、小児期の記憶の奥底に沈んだ故郷の地名「山路」が、ペンネームの姓と名になったと、私はどうしても考えずにはいられないのである。

(二〇〇八ノ一ノ七)